

子どもたちが博物館と出会ったら

「弥生土器ってこんなにざらざらなんだ。」
 「銅鐸を鳴らせてうれしかった。いい音がした。」
 「昔使ってた刀がピカピカ光っていてびっくりした。」
 「武士の鎧はかっこいいなあ。でも、重そうだ。」
 「博物館に来て、昔のことがいっぱいわかった。」

博物館では、時代や分野を飛び越えて学ぶことができるおもしろさがある。そして、子どもたちは、博物館で、実物の資料をみて、触って、感動、納得、驚きをこんなふうに表現している。



企画展を見ながらの学習

生涯学習社会となった今日、博物館は生涯学習施設として期待され、子どもから高齢者まで、あらゆる年齢層に親しまれ、学習の場となることが求められている。しかしながら、子どもたちにとって、博物館は、かたたくるしく縁のないところであり、訪れても退屈で窮屈なところ、という意識がこれまでの実状のようだ。特に、当館のような歴史博物館は、入館者の高齢化傾向が見られ、子どもたちの入館者数は、非常に少ない。16年度入館者をみると、小・中学生の占める割合は、約7%に過ぎない状況であり、この世代の子どもたちに、地域の歴史に親しむ場として、博物館をいかに活用してもらうかが大きな課題となっている。



勾玉作り体験

当館はこれまで、教育普及事業に力を入れ、子どもたちの体験事業にも積極的に取り組んでいるが、18年度には、新たな事業として、

- 日頃、博物館を利用する機会の少ない地域の小中学生に、博物館見学などを通して、岡山県の歴史を学んでもらうバスツアー「吉備の国歴史探検ツアー」
- 夏休みの期間、特別展「歴史の中のあそびとまなび」を開催し、江戸時代から現代にいたるがん具、教材などに触れながら、さまざまな遊びを楽しんで、遊びと学びの歴史を発見してもらう。

等々計画し、多くの子どもたちに、博物館で本物をみて楽しんで学んでもらいたい。そして、博物館との出会いの楽しさを実感し、新しい学びの創造の場としてほしいと思っている。

また、今まで以上に学校との連携も図っていきたくと考えている。多くの資料が並んでいる博物館の展示室では、多様な学習活動が展開でき、子どもたちの教室で



館内で収蔵資料を体験する授業

芽生えた学ぶ意欲は、博物館というもう一つの学校で一層高まっていくと思う。博物館の持つ教育資源を有効に活用して、子どもたちの学びの力を高めてほしい。

我々は、子どもたちが博物館を訪れ、目を輝かせて学習する場面が多くなることを願い、博物館で時を過ごす間に、一人でも多くの子どもたちが地域の歴史に興味を抱き、地域を誇りに思うようになってくれることを期待している。
 (館長 能登原 巧)

特別展への取り組み

「岡山の名宝」展—伝えられた美と匠の心—

私たちの郷土岡山は、古代から吉備の国と呼ばれ、日本の歴史において重要な位置を占め、様々な文化を生み出してきました。この展覧会は、「晴れの国伝来の美」「岡山発の工芸の粋～備前焼と日本刀」「岡山の匠～(国・岡山県指定)重要無形文化財保持者のわざと美」の3テーマから構成し、岡山にゆかりのある国宝(4点)・国指定重要文化財(23件)県指定重要文化財(31件)をはじめとする優れた美術工芸品、また、歴代の国・県の重要無形文化財保持者の作品を一堂に集め公開しました。弥生時代の作品から現代工芸作家の作品にいたるまで、岡山の美を一貫して紹介したのは、開館以来はじめてのことです。

本展は、この秋岡山県で開催された「晴れの国おかやま国体」「輝いて!おかやま大会」に合わせて、国体スポーツ芸術事業の一環として開催したもので、県外の方々にも、岡山の歴史と文化を紹介するよい機会になったと思います。

会期中には広島大学大学院教授安嶋昭氏による記念講演会「名宝で見る岡山の仏教」のほか、作家によるギャラリートーク(備前焼作家松井與之氏・日本刀作家安藤広清氏・備前焼作家伊勢崎淳氏)等を開催しました。また伝統芸能を継承する児童生徒の団体による無形民俗文化財の公演(「鴻八幡宮祭りばやし(しゃぎり)」「太刀踊(粟利郷天神社)」「備中神楽」「天曳神社宮原獅子舞」)を岡山県郷土芸能振興会との共催で行いました。

優れた作品と、様々な行事を通じて、岡山の美と匠の心、そして岡山の歴史と文化にあらためて御理解と親しみを持っていただけたのではないのでしょうか。
(学芸員 中田利枝子)



高校生による民俗芸能公演「天曳神社宮原獅子舞」

「吉備の渡来文化—渡り来た人々と文化—」展

この特別展では、古代吉備と中国大陸・朝鮮半島の関わりをテーマに、岡山県内から出土した渡来文物を集成展示し、その実像を紹介しました。

今回、新たな試みとして「見どころガイド」を作成し、全来館者に配布しました。これは、展示の見どころやお勧めの展示品、地図・年表などをまとめたもので、これを片手に観覧していただくことで、古代の国際交流についてより理解を深めていただくことを目指したものです。また、岡山県国際交流員の劉強さんと尹瑜珍さんの御協力により、中国語版と韓国語版を作成し、希望者に配布しました。これらを現代の国際交流にも役立てていただければ、嬉しく思います。

また、展示と連動した関連事業として、定例の「記念講演会」と「展示解説」に加え、華やかな衣裳を着た子ども達が異国風の踊りを行う「唐子踊」公演と、朝鮮半島の技術でつくられた古代山城鬼ノ城を子ども達が探検する「こども歴史探検隊」を開催し、いずれも盛況となりました。

今後も、こうした配布資料の作成や関連事業の開催と共に、「分かりやすさ」を意識した展覧会づくりを通じて、皆様の期待に答えていきたいと思えます。
(学芸員 佐藤寛介)

3か国語のパンフレット



こども歴史探検隊

常設展から

実物資料を中心とした展示を基本とする岡山県立博物館では、資料保存上の理由から春夏秋冬の常設展は毎月その展示テーマを変えています。子どもから大人まで、また普段あまり博物館へ足を運ぶ機会のない方から研究を目的とされる方まで、皆さんに楽しんで見ていただけるよう、わかりやすく同時に奥行きのある展示になるよう心がけています。

11月12日(土)からは、秋季展「絵とぎの世界」を開催しました。

室町時代後期ころから熊野比丘尼くまのびくにと呼ばれる女性宗教者たちは、人の集まる場所で「熊野勸心十界曼荼羅」などの大型の掛け絵を示しながら地獄極楽を絵とぎし、生と死を語り聞かせました。熊野山伏・熊野比丘尼とは、もともとは熊野三山(本宮・新宮・那智大社)整備のために勧進を行っていた人々です。岡山県瀬戸内市邑久町には、16世紀後期頃この地に定着した熊野比丘尼、そして彼女たちを支配した熊野山伏に関する一連の資料が伝えられています。地方に定着した山伏・比丘尼の活動や状況を示す資料がこれほどまとまっている例は我が国でも唯一であり、全国的な注目を集めています。

この秋季展は、このように貴重な資料が郷土岡山に伝えられていることをお知らせし、また「絵とぎ」に興味を持たれる方々にむけて、現在進行中の調査成果を広く公開するものでした。

この開催に合わせ、「絵とぎの世界」をより深く御理解いただくために2日間(11月26日27日)にわたるフォーラムを、絵解き研究会・日本宗教民俗学会・国際熊野学会・岡山民俗学会の共催で開催しました。初日は、奈良教育大学名誉教授赤井達郎氏による基調講演で幕を開けました。その後、熊野比丘尼に扮した新宮市教育委員会学芸員山本殖生氏による絵とぎ実演が行われ、ユーモアあふれる語り口に会場がわきました。2日目は、宗教史・美術史・地方史・民俗学など各方面の研究者からの最新の報告と、パネルディスカッションが行われました。一昨年世界遺産になった「紀伊山地の霊場と参詣道」の地元である勝浦町や新宮市の方々はじめ、各学会員も全国から多数参加し、盛会となりました。

多くの人と情報が集う機会を提供したこのフォーラムは、郷土の文化情報を発信するという県立博物館の使命のひとつを改めて認識させるものでした。

(学芸員 中田利枝子)

常設展



熊野比丘尼に扮して絵とぎの実演



パネルディスカッション

資料がケースにならぶまで ————— 「資料の目録をとる」

古文書には、さまざまな時代の情報が記されています。これらの情報を解読し、博物館の展示資料として活用するためには、資料目録の作成が不可欠です。今回は、目録作成の作業について紹介します。

古文書はそれぞれ家に伝えられたもので、蔵の中の長櫃^{ながびつ}や文書箱に納められています。江戸時代以降の文書が中心であり、庄屋などを勤めた家に残された村方文書、商家などに残された町方の文書、武士の家に伝えられた武家文書などに分類されます。ここでは、村方文書の事例を紹介します。

資料調査の第一の作業は、文書の掃除です。文書は、長期間蔵の中に置かれていたので、一旦蔵の外に出し、風通しを行い、同時にほこりやゴミを取り除いてやらなければなりません。掃除が終わると個々の資料の分類を行います。土地関係のもの、租税に関するもの、訴訟に関するもの、分類番号に従い、資料のグループ分けを行います。グループ分けが終わったら、資料の形態による分類を行い、さらにその中で年代順の整理を行います。ここまでの作業が終わってようやく、目録取りの作業にとりかかります。

資料に固有の番号を付け、目録用紙に番号・分類・資料名・年次・資料の形態などを記入していきます。資料の1点1点についてこの作業を繰り返し行います。村方文書のなかには、総点数が数千点にもおよぶものがあり、目録の完成には多くの人手と時間が必要になります。検地帳などの帳簿形態の資料は、表紙に資料名が記載されているため、これを読み解いて記入すればよいのですが、紙に書かれた一紙物の資料は、本文の内容を解読して資料名をつけなければいけないので大変手間が掛かります。こうした作業を経て古文書は研究の対象となり、読みを記した釈文、説明文とともに博物館で展示されるのです。

古文書は、くずし字で書かれており、解読するためには、一定の訓練が必要です。また、候文^{そうろうぶん}はなじみのないものですが、難しいと思ひ込むのではなく、昔の人が何を記録したのかという点に興味を持つと古文書のおもしろさが見えてきます。

(主査 貝原靖浩)

ただいま準備中！

企画展 茶席のたたずまい

会期 | 平成18年4月13日(木)～5月14日(日)

岡山を代表する茶人である伊木三猿齋ゆかりの書画や茶道具を紹介し、数寄者^{すきしや}と呼ばれる茶人の茶席をしのびます。また、茶席でおこなわれる茶事の流れを、さまざまな茶道具の取り合わせから再現します。



伊木三猿齋像



赤楽茶碗

特別展 歴史の中のあそびとまなび

会期 | 平成18年7月21日(金)～9月3日(日)

子どもたちが、遊びと学びの歴史に家族とコミュニケーションを図りながら触れられるよう、江戸時代から現代にいたるがん具、教材、生活用品や記録資料などを紹介します。



ランドセル



漢画独稽古(かんがひとりげいこ)

岡山県立博物館だより 第65号

発行日/平成18年3月31日

発行者/岡山県立博物館 館長 能登原 巧

〒703-8257 岡山市後楽園1-5

TEL:086-272-1149 FAX:086-272-1150

URL <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kenhaku/hakubu.htm>

